

—暮らしに息づくハレとケのまち京都—

(1) 京都の祭礼

京都の人々は、暮らしの中に様々なハレの営みを取り入れることで、ハレとケのめりはりある生活を大切にしてきた。

そのハレの場で最大のものと言っても過言ではないのが、祭礼である。「京都には祭りのない日がない」と言われ、一年を通じて市内各地で祭礼が行われる。そして、その祭礼が京都の人々の生活のよりどころとなっている。

この項では、祇園祭、葵祭、時代祭の京都三大祭や京都五山送り火、京都の奇祭として知られるやすらい祭、鞍馬くらまの火祭などの行事などを中心に、歴史的に積み重ねてきた京都の祭礼により形成された歴史的風致を、一年の流れに沿って示していく。

ア 具体事例

(7) 冬（1月～2月）

a 十日ゑびす（初ゑびす）



図2-10 十日ゑびす（恵美須神社）

十日ゑびすは、1年の商売繁盛と家運隆盛を願う行事で、1月8日～12日、京都市東山区の恵美須神社で行われる祭礼である。

舞台となる恵美須神社は、鎌倉時代、栄西禪師が建仁寺建立にあたって恵美須神を祀ってその鎮守としたのが始まりとされる。室町時代には幸福をもたらす七福神の信仰が成立し、恵美須神社も商売繁盛、家内安全の神として大衆の信仰を集めている。

この十日ゑびすは、福の神「ゑびすさん」の誕生日の1月10日に、福をあやかろうとする

庶民の願いから始まった祭りとなされ、求めた吉兆笹に、千両箱や福俵、福をかき集めるという福熊手などの縁起物を飾った参拝客で賑わう。

京都での十日ゑびすの発祥は定かではないが、寛政11年（1799）発行の「都林泉名勝図会」みやこりんせん みやうしょうずえには、建仁寺門前の十日ゑびす祭としてその様子が示されている。なお、ゑびす信仰の最たる象徴とも言える笹の歴史はさらに長く、現在から約400年程前の慶長年間に考案されたといわれている。

参拝の最後に忘れてはならないのが、念押しのお参りである。耳が御不自由な「ゑびすさん」に声が届くよう、本殿横の板を叩いて注意をひき、もう一度願いを込める。境内は、人々の喧騒とともに笛や太鼓のお囃子が流れ、柏手や参拝者がトントンと板を叩く音が混じりあい、活気に満ちた独特の空気に包まれる。

また、東映太秦映画村の女優さんによる宝恵かごに乗っての社参や福笹の授与、宮川町・祇園町の舞妓さんの奉仕による福笹や福もち授与の行事などもあり、新年を祝う雰囲気や一段と華やかに彩られる。四条通から恵美須神社までの参道には露店がずらりと立ち並び、伝統産業など中小企業の経営者が多い京都の1月の風物詩となっている。参詣する人々は、商売繁盛を祈願しつつ、一年無事に過ごせることを感じている。



写真2-9 十日ゑびす

提供 恵美須神社（京都）

b 節分祭・節分会

2月3日（4日の年も）、市内各寺社で節分行事が行われる。

節分は、春夏秋冬の節目のことであったが、特に新しい年を迎える意味をもつ立春の前日の儀礼は、大晦日に宮中でおこなわれた追儺ついなの